

偽せ者

長崎から電話があった。

「早坂……暁さんですか」

なにか窓の外から窺^{うかが}っているような口ぶりである。

「そうですが」

「ご本人、ですね」

「あなたは、どなたですか」

「失礼しました。長崎で小さな出版社に勤めているKです。まことに、変な質問ですが、早坂暁さんご自身でいらつしやいますね」

「はい。私は早坂暁本人です」

少し、間があった。

「長崎にお住いを持っていますか」

「住い？ いえ、私の住いは東京です。長崎へは、今年は何度か伺いましたがね」

ちょうど、長崎を舞台にしたテレビドラマを書いていたので、二度ほど取材に行った。

「……体の不自由な息子さんがいらつしやいますか」

「体の不自由な？……私は子供がいません」
絶句したように沈黙があつて、

「どうも失礼しました」

電話を切りそうになった。

「ちょっと待って下さいよ。いきなり電話をしてきて、変な質問するだけで切られたのでは、たまりません。こんどは、こつちから質問します」

「はあ、どうぞ……」

困った様子が声の調子に出ている。

「なぜ、こんな電話をしてこられたか、理由を教えてください」

「……実は、早坂暁さんが長崎に住んでおられるので、確認の電話を試みたのです」

「私が長崎に住んでいる……」

「はあ。もう一年ぐらい前から。奥さんと、体の不自由なお子さんと、三人家族で……」
狐につままれたとは、こんな感じであろう。

「同姓同名の人ですか……」

「いえ、『夢千代日記』を書き、『ダウンタウン・ヒーローズ』も書いている早坂だと、ご本人がおっしゃってます」

「待って下さい。そのご本人は、私以外にいないはずですよ」

「いや、やっと今、そのことが判りました。こちらにいる早坂さんは、別人、というか、偽せ者というのが判明できました。どうも失礼しました」

また切りそうになるのを押しとどめて、詳しい事情を聞いた。

その長崎の早坂暁氏は去年の末ごろから長崎に住みはじめたそうである。

近所の喫茶店によく出入りするようになり、そのうち、「自分はシナリオや小説を書いている早坂暁だ」と喫茶店の主人に名乗った。店の主人は、その名を知っていたので、友人の出版社に「おもしろい人が長崎に住むようになったよ」と知らせた。

ごく内輪の人たちが、早坂暁を囲んで話を聞くようになった。東京のテレビ界や出版界の話などを聞いて「いい話をしてもらえる人に住んでもらって、良かった」とKさんたちは思った。

六月、長崎の新聞に、早坂暁氏の『華日記』という小説が文学賞をもらったので、その授賞式が写真入りで掲げた。東京会館で、となっている。

「あれッ、おかしいな」

Kさんは授賞式の日をもう一度確認した。その日はたしか長崎の早坂暁氏は、いつもの喫茶店に姿を見せていた。授賞式のあった六時ごろは間違いなく長崎にいた。それで、NHKに問い合わせた本人確認の電話となったわけである。

「あなたは私の顔を知らなかったわけですね」

「いえ、写真や、テレビに出ているのを見て知っています」

「えッ、私の顔を知っています……。じゃ、その長崎の早坂さんは、私に似ているのですか」

「ええ、よく似ています。ですから、私ども、すっかり信じたのです。失礼しました」

「いや、失礼どころか、確認の電話を下さって、有難かったです。おかげで私の偽せ者がいるのが判りましたから」

実は以前に、ある温泉地の旅館から、私あてに請求書が届いた。開けてみると二カ月近くの宿泊代の請求である。芸者まで呼んでいて、百万を超える金額だ。もちろん、私の名を詐つての無銭宿泊、無銭飲食である。この温泉を舞台にして「夢千代日記」みたいなドラマを書いてあげようと、言ったというのだ。

そんなことがあったので、すでに金銭的な貸借などは生まれていないか、急いで確かめた。

「いや、……お金を出せば、ビクターに顔がきくから、詩を歌にしてレコードにしてあげますよ、という話がありました」

もう、動きだしている。

「その人に、遠まわしに嘘だと判っていると、教えてくれませんか。その人のためでも、ありますから」

「判りました」

電話は切れた。

この話をNHKのプロデューサーに話したら、

「あッ……」

と彼は声をあげた。

「実は半年前、変な電話がありました」

それは大分からの電話で、女性の声だった。

——早坂暁さんは、どのような人物かお訊ねしたい、と言うのだ。

私のドラマはNHKが大分なので、それでNHKに電話をかけてきたらしい。

——近頃、早坂暁さんは大分市へよくいらつしやっているが、実は私の一番の友達が、その早坂さんに沢山のお金を貸している。結婚するとういうような話もしているが、あの早坂暁さんが、どうして私の友達から多額の金を借りるような境遇なのか、どうも私には解せない。それで、思い切ってNHKへ電話をしたのですが……。

プロデューサー氏は話の突拍子なさと、その女性の畳みかけるような話しぶりに、少し「精神の不自由な」（近頃、こういう言い方をするのです）人物かと思つて、「早坂さんは大分など行つてるヒマはありません。ずっと私の頼んだドラマを東京のホテルで書いています」と、電話を切つた。あまりに馬鹿馬鹿しい電話なので、私には話さなかつたというのだ。

「大分と、長崎か……。同じ人物かもしれませんね」

だんだん気味悪くなつてきた。

長崎のKさんから電話があつた。

「本人に、話をしました。早坂暁さんではないでしょうと、はつきり言いました」

「どうでした!?!」

「いや、嘘をついて申し訳なかつたと、謝られました」

よかつた……。

「早坂さん、弟さんはいますか?」

「私は末ツ子ですから、弟はいません」

「……その人は、実は早坂暁の弟だと言うのです。そして、『夢千代日記』や『天下御免』など、半分以上は自分が書いているのだと……」

ああ、そんな弟がいてくれたら、私はどんなに嬉しいことか。

「そんなことは嘘です。大嘘だと、私本人が言っていると伝えて下さい」

「そうですか……。しかし、その人は体の不自由な息子さんと、奥さんの三人で、しみじみと暮らしていらつしやるんですよ……」

「えッ？ しみじみと、ですか」

「はあ。早坂さんのドラマ世界の人のように、しみじみと暮らしておられるので、……ぼくはもう、これ以上、タッチしたくありません」

Kさんの電話は切れた。

私の名を許る人物が、長崎でしみじみと暮らしているとは、実に奇妙な気分である。さらに、大分市で女の人から沢山の金を巻きあげているというのも、一そう奇妙で気味が悪い。

近く大分市へ講演で行くことになっているが、私には嘘偽りなく初めての訪問地である。どうか、いきなり女の人とび出してきて、私の頭を叩いたりしませんように――。